

野間清先生を悼む

井村哲郎

野間清先生が去る7月14日お亡くなりになった。

私の野間先生とのおつきあいは満鉄調査部の活動をめぐってであったという経緯もあり、野間先生の戦後の活動、中国研究所時期、愛知大学時期については何も存じあげない。年齢もはるかに下の私ではなく、ほかに適任の方はいらっしゃると思うが、野間先生の満鉄での活動についての思い出をいくつか記すことで、追悼文とすることをお許しいただきたい。

まず、野間先生のご経歴を掲げる。

明治40(1907)年10月	生まれ
昭和6(1931)年3月	京都帝国大学法学部卒業
同年4月	南満洲鉄道株式会社入社、交渉部(部付)
同年7月	総務部調査課
昭和7(1932)年4月	経済調査会第五部(法制係)
昭和9(1934)年4月	経済調査会新京駐在幹事室
昭和10(1935)年11月	経済調査会第五部(諸税班)
昭和11(1936)年9月	産業部資料室調査班(満洲経済係)
昭和12(1937)年4月	欧米留学(産業部付)、プリンストン大学 聴講生
昭和14(1939)年1月	留学より帰国
同年4月	調査部総合課(第五班)
昭和15(1940)年4月	調査部総合課(第一班)
昭和16(1941)年4月	上海事務所調査役(南京駐在)
昭和17(1942)年9月	「満鉄調査部事件」で関東憲兵隊司令部に より検挙
昭和18(1943)年3月	南満洲鉄道株式会社退職
昭和20(1945)年5月	判決
同年9月	中長鉄路公司理事会調査処(長春)に留用 以降、東北自然科学院農学系など東北各 地の機関に留用
昭和28(1953)年8月	帰国
昭和32(1957)年4月	中国研究所をへて愛知大学法経学部教授
昭和58(1978)年3月	愛知大学を退職

このご経歴は、『アジア経済』に掲載した「『満洲』農村実態調査

遺聞」¹⁾のために野間先生ご自身が書かれたものである。なお、このご経歴の他に野間先生の満鉄時代の執筆著作目録も掲げられているが、膨大であるために省略する。

野間先生は京大をご卒業後、直ちに満鉄に入社されて、当時張学良政権の東北交通委員会との間で鉄道権益をめぐる交渉を行なっていた交渉部に配属された。交渉部は外務省重細重局長もつとめた木村鋭市理事が部長を兼務しており、田中盛枝の下でいくつか報告をまとめられたとのことである。しかし、その期間は短く、野間先生によれば、さして仕事もしないまま調査課に移られ、さらに経済調査会（昭和7年1月末設立。以下、経調）に移られた。経調時代には、満洲国臨時産業調査局が行なった農村実態調査に積極的に関与され、調査項目案の作成に携われ、農村にも入られた。また経調が満洲の農村社会を把握するために実施した農村調査にもいくつか参加されている。この時期『満洲評論』にペンネームで満洲国の財政政策を暗に批判する文章も書かれた。経調新京駐在幹事室では土曜会という勉強会を組織されて、満洲国の若手の官僚と交流されたが、この会は「アカ」の集まりだとにらまれ、永くは続かなかつたとされている。さらに大上末広など、後に経調派と呼ばれるようになる人脈との行き来が深かつた。これらの活動が、後に「満鉄調査部事件」で野間先生が満洲国治安維持法違反のかどで関東憲兵隊に検挙された遠因となつたと思われる。野間先生の経調時代の活動については、「『満洲』農村実態調査遺聞」に詳しく触れられている。

先に触れた野間先生の著作目録によれば、野間先生の満鉄での著作はほぼ昭和15年で終わっている。外国留学から帰国されてからは、調査部総合課といういわば調査企画、調査業務部門に携われたためである。しかし、野間先生の満鉄調査組織での活動のもう一つの中心は、実は、この時期であつた。

満鉄は昭和14年4月いわゆる大調査部を発足させた。これからあと満鉄調査部事件で関東軍によって実質的な調査活動の息の根を止められるまでの数年間、満鉄の調査のもっとも重要かつ活発な時期であつた。もちろん関東軍の下に成立し、その後関東軍の鬼子のよくな存在になるまでの経調も、満洲国初期の経済政策の立案に係属したという意味では重要である。しかも、満洲国の五ヵ年計画立案には役立たないと見られるや取りつぶされた経調の末路は、調査部の最後とよく似ているとも言える。しかし、中央試験所など自然科学系の調査部門を含めて組織された規模の大きさといひ、立案調査やソ連調査など軍と密接に結んだ各種調査を行ないながら、それとは別に総合調査や慣行調査を実施した調査部は、やはり経調とは大きく性格の異なる組織であつたというべきであろう。そして何より

も経調にはあとがあったのに対して、調査部の最後はほぼ満鉄の最後となったのである。

調査部はいわゆる総合調査で、軍と一定の距離をおいた独自の、あるいは時勢とは離れた科学的な調査を行なおうとした。科学的とは、マルクス主義的な方法を意味しており、調査の目的は軍の政策に変更を迫ろうとするものであったということ、野間先生ほかの総合調査関係者に共通する発言である。このことについては当時かからさまな批判があったが、それでもやはり調査部は満鉄の調査活動の輝ける時期であったといえよう。そして、総合課という調査の企画・調整という中心的組織にあって総合調査の立案や、中国慣行調査の企画²⁾にあたられたのが野間先生であった。

私が野間先生とお話するようになったのは、アジア経済研究所（アジ研）で満鉄調査組織にいた方々からヒアリングをする会を毎月1回行なうようになった1982年からである。そのころは愛知大学を退職されてまもない頃で、野間先生は豊橋に住んでいらっしやった。遠距離在住の方への交通費も出さない研究会であったため、出席される頻度はそれほど高くはなかったが、それでも野間先生が関与された調査についての報告があるときなど、節目にはとくにご出席いただいた。

そのころ「満鉄調査部 総合調査報告集」³⁾に収録する資料をアメリカの議会図書館から収集するお手伝いをした。野間先生が中心になって執筆されたこの史料集の解題は、支那抗戦力調査以外はそれまでほとんど知られていなかった総合調査について、戦時経済調査や日満支インフレ調査などに焦点をあてて解題し総合課についても解説したもので、現在でも最良のものだと思う。実際に総合課の中心にいらした野間先生でなくては書けないものであった。その後龍溪書舎から刊行されだした「満鉄史料叢書」についても、いくつか資料集めでお手伝いした。なかでも、今年野間先生よりも少しさきにやはり亡くなられた、満鉄人事畑の最後の生き字引であった藤原豊四郎さんの解題を付して刊行された「満鉄在籍社員統計」⁴⁾で見つけて、コピーをさしあげたことを覚えている。この「満鉄史料叢書」は世に多い復刻書とは異なり、野間先生のように目利きでないとは不可能ない史料の復刻ばかりであった。

けれども、本当に野間先生から満鉄の調査活動について教えていただくようになったのは、アジ研での研究会のもう少し後のこととなる。その研究会の記録を「アジア経済」に「満鉄調査関係者に聞く」として連載するようになり、原稿のとりまとめをしていたときである。経調や調査部が調査活動をどのように行なっていたのか、

当時はそのことをどのように受け止めていたのかというイメージが当事者の間でも、ずいぶん食い違っていることに気付いた。そのためそのころは西武池袋線江古田にお住まいだった野間先生をお訪ねして、満鉄調査部論をおうかがいした。最初野間先生には、総合課の時期について話をされることにためらいがあるように感じられた。その理由は、もちろん私の推測にすぎないが、総合課について話をすることになれば、つきつめて言えば、その後の満鉄調査部事件なくとも含めて、調査部内のごたごたした事実を話しなければならなくなる、それはやはりうっとうしいことだということであったのではないか。しかし結局、その頃にはすでに、総合課に在籍した主だった人たちからお話を聞くことはほぼ不可能な時期にかかっていたこともあって、最終的には、野間先生の目からみた総合課についてお話いただくことを了承された。4月の終わりだというのに肌寒い日に、5時間ほどにわたってお話をおうかがいしたことを記憶している。その内容は「調査部総合課」と題して『アジア経済』に掲載させていただいた⁵⁾。あの連載に価値があるとすれば、この野間先生のお話と石堂清倫さんの調査部論を収録できたことだと⁶⁾、私は今もひそかに誇りに思っている。そのときには、野間先生から、いわゆる経調派と資料課派との対立とされることや、調査部員の人物論もおうかがいした。たとえば大上末広、鈴木小兵衛、渡辺雄二、松岡瑞雄、横川次郎といった方々の人物論や、慣行調査の立案経緯、東亜研究所との慣行調査の打合せ会でのできごとについてのお話の印象は今も鮮烈である。慣行調査実施をめぐる総合課内のもめごとから、野間先生が1か月以上も出社を拒否されたというお話もおうかがいした。満鉄というのはこの時期になってもなんというのんびりした、包容力のある組織であったのかという、いわばあきれたという印象を受け、また、私がお会いするようになってからは想像もできない“過激な”野間先生には驚かされてしまった。もう夕暮れで、薄暗くなってきた応接間でたんたと野間先生はそんな話をされた。そのときだったと思う。私は失礼もかえりみず、野間先生に、軍から弾圧を受けることを覚悟して総合調査は行なわれたのか、という趣旨のことをお尋ねした。野間先生は、満鉄の調査には甘いところがあったとおっしゃったが、このご返事にはなにか奥歯にものがはさまるようなところがあって、おっしゃりたい本当の意味はよく理解できなかった。

野間先生に小林実さんの『リポート「撫順」1932』⁷⁾という著書を紹介していただいた。小林さんは終戦時撫順中学の1年生で、自営業のかたわら、平頂山事件や撫順の万人坑、コレラ防疫事件などについて可能な限りの資料を探してまとめられた。この本はなかなか

かの好著であるが、小林さんが急逝されたあと小林さんの蔵書のアジ研への寄贈について、仲介していただいたのは野間先生であった。小林さんの蔵書は、個人がそれほど長くはない期間に目的意識をもって集めたものとして、粒よりのものであった。

またその後満鉄会蔵書のアジ研寄贈についてもご尽力いただいた。満鉄会は戦後旧満鉄社員によって創設された団体であり、長い年月の間に会員からの寄贈と、有馬勝良さんという満鉄で現業にいらした資料収集に熱心な方の努力で⁸⁾、3000点近い図書が集まっていた。この蔵書のアジ研への寄贈について、野間先生にお骨折りをいただいたのであった。このとき野間先生は、国会図書館では一般の図書にまぎれこんでしまいコレクションの特徴が消えてしまうし、いくつか希望のあった大学図書館では満鉄会会員など一般の利用者が利用しにくいということ、アジ研に寄贈する理由としてあげられていた。このコレクションを実際にアジ研にいただいたのは私が2度目にアメリカに長期滞在していた間であった。このため私自身は引き取りに立ち会ってはいないけれども、銀座の満鉄会の事務所で、アルバイトをお願いした何人かの人と一緒にほこりにまみれながらカードを作成したことを記憶している。満鉄会コレクションも、満鉄社員の回想録を中心に充実したものであることはいうまでもない⁹⁾。

ここ数年、野間先生は足の具合を悪くされて、長い距離は歩けなくなってしまうれていた。そんななかを、たまたま自宅からアジ研までバス1本で乗り換えなしで来られるということもあって、体調が許す限り1、2か月に一回はアジ研に見えた。杖をついて来られる姿が大変そうだったので、ご用があれば電話をいただければ必要な資料は郵送しますからと、何度も申し上げたが、そんな私を無視して、野間先生のご用事のお手紙もいただいた。

年譜にもあるとおり、野間先生は戦後国民政府とソ連の共管になった満鉄の後身である中長鉄路の調査処でのお仕事を皮切りに、解放後の東北で中国側の仕事を手伝われていた。この時期のことについてお話をおうかがいしたいとお願いしたのは、昨年暮れか今年初めのことであった。野間先生のご都合もあって、今年のゴールデンウィーク明けくらいにどうかと思っていた。その後野間先生から何度かお電話をいただいた。新しいお仕事のために(残念なことに、このお仕事は何であるのかはこのときには聞き漏らした。おそらく野間先生にとっての同時代の調査部を再論してみたいと考えていらっしゃる)、書齋に書架をおいて蔵書を並べ直したいので、野間先生の書齋に残っていた満鉄会コレクションの一部(大部分は先ほどの有馬さんが作られた満鉄刊行物の所在メモであ

った)をはやく引取ってほしいということであった。その内容を見に2月の終わりか3月初めの日曜日にお邪魔した。その後3月末にその段ボール箱を受領に行ってお会いしたのが、最後になってしまった。このときは車を待たせており、ご挨拶もそこそこに失礼してしまった。後から来て満鉄などを調べだすことになった者の勝手な願望が叶えられなかったことが、残念である。まだまだ教えていただくことは沢山あったはずだ。

また満鉄調査部の最後の“おき”のような仕事になった中国の慣行調査については、農村慣行調査だけが脚光を浴び、とくに松山貞夫さんを中心に上海で行われた商業慣行調査が戦後まったく無視されていることに、慣行調査の発案者のお一人として、野間先生は、ずいぶんご不満のようであり、異見がおありのようであった。アジ研に慣行調査に関する東亜研究所サイドの文書が入ったことを契機に、野間先生と私は、商業慣行調査、都市不動産慣行調査の満鉄調査部側の報告書を復刻したいものだと話をして、少しずつ準備をしていた。解題を書いていただく最適の方を失ったことになる。私ももちろん残念だが、野間先生はもっと心残りであったに違いない。おうかがいしていたいくつかの仕事はなんとか果たしたいと考えている。

この8月長春を訪問した。野間先生と長い間の満鉄研究の上での学友でもあった中国における満鉄研究の大家、蘇崇民さん(前吉林大学日本研究所教授)、それから解学詩さん(吉林省社会科学院満鉄資料館)にお会いして、野間先生の訃報をお知らせした。お二人から、ご遺族にお悔やみをお伝えしてほしいとの伝言があったことも記しておきたい。

最後に奥様についてのエピソードを記す。奥様にお会いしたのは、私が京都に所用ででかける途中、豊橋の病院に入院されていた野間先生をお見舞いしたとき一度だけである。奥様が亡くなられてしばらくしてお宅をお邪魔したことがあった。そのとき玄関にかけられた花飾りに偶然目が行ってしばらく眺めていたら、野間先生は、これは家内が作ったもので、家内は飯田深雪さんの弟子だった、と慈しむようにおっしゃったことが印象的であった。

- 1) 「『満洲』 農村実態調査遺聞」(I)~(II) 報告者: 野間清 (特別連載満鉄調査関係者に聞く 第1回~第2回) (『アジア経済』 第26巻第4号, 第6号 1985年4, 6月)。
- 2) 中国慣行調査については、「中国農村慣行調査」(I)~(II) 報告者: 野間清・福島正夫 (特別連載 満鉄調査関係者に聞く 第10回~第11回) (『アジア経済』 第27巻第4号, 第6号 1986年

4月、6月)ある。この掲載にあたって野間先生は、回想の正確を期すために、総合課で野間先生と一緒に慣行調査の企画にあたられた山本純愚さんに問い合わせをされた。その際、山本さんからの返信もあわせて収録させていただいたが、この文章があるために、この報告はさらにいいものになったと思う。また東京側で慣行調査に参加された福島正夫先生の奥様、福島小夜子さんが福島先生の著作集に、福島先生の慣行調査での華北旅行記録を掲載された。この資料によって、現地での満鉄調査班の内容がさらによく分かるようになった。福島正夫「第一次北中支旅行日記」、同「第二次北中支旅行日記」がそれである。この記録はいずれも福島小夜子編『福島正夫著作集 第7巻 法と歴史と社会とⅠ』勁草書房 1993年に収録されている。

- 3) 野間清・下條英男・三輪武・宮西義雄『満鉄調査部 総合調査報告集』亜紀書房、1982年。
- 4) 満鉄会編『満鉄在籍社員統計』(満鉄史料叢書 10)龍溪書舎 1991年。
- 5) このインタビューの記録は、野間清「調査部総合課」Ⅰ～Ⅱ(特別連載 満鉄調査関係者に聞く 第33～34回)(『アジア経済』第30巻第8号～第9号 1989年8月～9月)。
- 6) 石堂さんへのインタビューは、石堂清倫「調査部資料室と大連図書館—昭和14(1939)年～昭和20(1945)年—」(特別連載 満鉄調査部関係者に聞く 第31回)(『アジア経済』第30巻第2号 1989年2月)と同「満鉄調査部は何であったか(補遺)」(特別連載 満鉄調査関係者に聞く 第32回)(『アジア経済』第30巻第5号 1989年5月)である。
- 7) 撫順問題調査班『リポート「撫順」1932』1987年 私家版 都立書房発売。
- 8) 満鉄会編『満鉄資料を求めて—有馬勝良遺稿集—』1986年。本書は野間先生が『満鉄会報』に掲載された有馬さんの遺稿を整理・編さんされたものである。
- 9) 現在では、この満鉄会コレクションは仮整理されて、仮目録が作成されている。ただし、アジ研の書庫が手狭なために現物は横浜の倉庫に預けられており、閲覧を希望される場合には、前日の午後3時まで申し込んでいただくというご不便をおかけすることになる。また小林実さんの蔵書は、一般書と一緒に整理されたために、それだけを単独にとりだすことは難しい。ただし、どの本がそうであるかをコンピュータで検索することは可能である。